

# 日本で4番目の公認女医 本多銓子について

NPO法人めぬまガイドボランティア阿うんの会講演会



本多銓子  
(東京慈恵会医科大学病院提供)

日時 令和3年10月25日（月）  
午後1時30分～3時  
場所 熊谷市妻沼中央公民館大会議室  
講師 久喜市立郷土資料館  
副館長兼学芸員 栗原史郎

- 彰義隊の上野での敗戦後、生き残った敏三郎は、名を晋と改め、しばらく静岡で隠遁生活を送りました。
- その後、晋は渋沢栄一の推薦を受け、明治3年（1870）7月に民部省に出仕。次いで大蔵省に入りました。同5年（1872）2月、大蔵少輔吉田清成に随行してアメリカ合衆国からヨーロッパに渡航し、翌6年（1873）に帰国しています。

- ・銓子は父晋の一人娘で自慢の種でした。
  - ・明治5年（1872）に日本で初めて開設した官立の東京女学校（通称「竹橋女学校」とも言う。）に入学し、また、書を当時有名な書家佐瀬得所（させとくしょ）（1822～78）の教えを受けるなど才媛でした。
- 
- ・明治6年（1873）11月29日に明治天皇の皇后（後の昭憲皇太后）が東京女学校に行啓され、学習の様子をご覧になられた際は、銓子を含む成績優秀な15名の生徒が賞与として英語の辞書を賜わっています。

- ・銓子は伯母の出口せい（晋の姉。「たか」とも言う。日本キリスト教婦人伝道者の人）に可愛がられ、その影響でキリスト教を信仰するようになりました。
- ・銓子は母梅子とともに明治9年（1876）頃キリスト教徒になり、その信仰は生涯変わることはありませんでした。
- ・明治5年（1872）、大蔵少輔吉田清成の米国派遣に伴い父の晋が随行を命じられた際には、銓子は伯母が身を寄せる米国長老協会宣教師力口ザース夫人の開設した築地居留地のA6番女学校に預けられ、英語を学びました。
- ・また、明治10年から11年（1877～78）頃には伯母を介してアメリカ人宣教師メアリー・ツルー夫人のもとで英語を学んだと思われます。

- ・銓子は14才の頃には外交官河瀬真孝（まさたか）子爵夫人のために通訳をつとめるほど英語が上達しました。
- ・河瀬夫人は伊豆堇山代官江川太郎左衛門の娘で、銓子の母方の祖父雨宮中平（あめみやちゅうべい）が江川太郎左衛門の江戸詰家老であったことから本多家とも親交があったようです。

## 医師としての経歴

- ・銓子は、明治14年（1881）から女医になるべく、後の海軍軍医総監高木兼寛が創立した成医会講習所（東京慈恵会医科大学の前身）の別科生に抜擢されました。

- これは英國留学から帰国した高木が当時の日本の女子に近代医学を修得する能力があるかどうかを試す意味もあって、東京女学校（竹橋女学校）から二人の才媛、松浦里子と銓子を選び入学させたことによるものです。



成医会講習所時代の本多銓子（明治14年12月）、写真中央が銓子、左が松浦里子、右が山崎富子。

明治14年1月  
中旬  
京橋輪  
屋町11番地  
成医講習所中  
学生山崎富子  
ならびに松浦千里氏  
なり。ただし山崎富子、同氏の帰國  
につき計らずも同氏を伴いてこれ  
を写す。本多銓女」とあります。  
これによれば当初は山崎富子  
(1850~1900) も、銓子や松浦里  
子とともに成医会講習所の学生と  
して選抜されたと考えられます。

- ・当時女性が医師になることは困難でした  
が、銓子は高木、實吉両医師について解剖その他の実地研究をなし、終に医学全科を卒業。
- ・明治21年(1888)、24才の時に、医術開業試験後期試験に及第し我が国における第4番目の公認女医となりました。

\* なお松浦里子は明治18年（1885）に医術開業試験前期試験に合格しましたが、肺結核の病状がすすみ、後期試験を受けることができず医師を断念。看護婦に転身しています。



表1 明治女医の基礎資料

氏名	生年	本籍地	出発地	登録年月	明治年間	1914・大正3年	1920・大正9年	1930・昭和5年	1937・昭和12年
1 松浦里子 (松浦03)	1864 (元治01)	埼玉	好辻院	1885/M18-12	東京市本所区 (合)、北村宿 相模原	死去 (1913)			
2 牛澤タメ (牛澤05)	1864 (元治01)	埼玉	東京女子 院、済生	1887/M20-03	均木原大田郡 (現)、大早郡 (合)	均木原大田郡 (現)	新木原足利山岩 田宿浅一野)		
3 高橋 喬 (高橋05)	1862 (文政05)	愛知	済生	1887/M20-12	東京市日本橋区 (現) (合)	死又		死去 (1927)	
4 本多セイ (元治01)	1864 (元治01)	江戸 (埼玉)	成美会	1889/M22-07	石山御殿 (鶴), アーリス女子院 新宿	葵采		死去 (1922)	
5 丹見 真 (西田06)	1859 (安政06)	東京	ペリエ・セイ 女子医専門大学	1890/M23-01	石山店元 (鶴) 帝室醫科進士立	葵采			
6 飯尾リカ (飯尾01)	1865 (慶応01)	群馬	済生	1890/M23-01	山梨県甲府山 (合)	東京市本所区 (現)		死去 (1919)	
7 村上 乾 (丸治01)	1864 (丸治01)	岐阜	済生	1891/M24-04	村上宿で移動, 越後郡五ヶ瀬郡 (合), 日置で 授業	岐阜県五ヶ瀬郡 (現), 日置で 授業			
8 斎川キス		神奈川	明治医学校	1891/M24-04					
9 関谷八重 (関谷02)	1866 (慶応02)	東京	済生	1891/M24-04	中町市本所区 北村宿土呂郡 (現)	北村道土呂郡 (現)	北村道土呂郡 (現)	北村道土呂郡 (現)	北村道土呂郡 (現)
10 丸茂久平 (丸茂01)	1869/M02	岐阜	済生	1891/M24-07	東京市下谷区 (現) (合)	東京市下谷区 (現)	東京市下谷区・ (現)	東京市下谷区・ (現)	東京市下谷区・ (現)

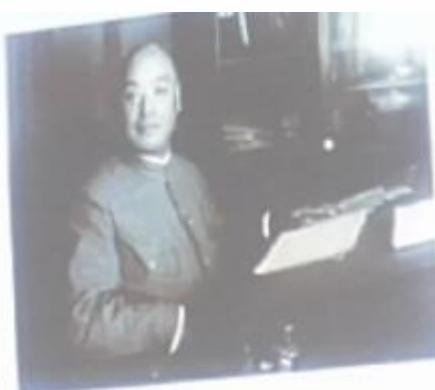
三崎裕子「明治女医の基礎資料」(『日本医史学雑誌』第54巻第3号、2008) より

## 本多銓子の医業活動

- ・明治22年（1889）、銓子は婿養子として東京農科大学の学生であった折原静六を婿養子に迎えて結婚。家庭生活に入りました。
- ・そして、その年から芝区新堀町の自宅に医業を開業し広く内外の診察にあたりました。

|

- ・明治23年（1890）3月、静六のドイツ私費留学後は一層医業に励みました。
- ・ちなみに夫の本多静六（1866～1952）は、日本で最初の林学博士で、日本の公園の父と称されています。



- ・銓子は自宅での診療の傍ら、慈恵医院に婦人科の診察を手伝い、横浜フェリス女学校に衛生学を講じ、慈恵医院の看護婦養成所の講義を受け持つなど多忙を極めました。
  - ・明治天皇第6皇女常宮昌子（つねのみやまさこ）内親王殿下の侍医も務めています。
- 
- ・明治23年（1890）1月末に長女が生まれたばかりで大変な時期でしたが、充実した生活ぶりでした。



家族写真（明治23年頃）、左から本多晉、初孫てる子、娘銓子、妻梅子

- ・ちなみに慈恵医院の婦人科は、明治22年（1889）9月に院長の高木兼寛により新設された診療科目で、その主任には同年ペンシルベニア女子医科大学を卒業した洋行帰りの女医、岡見京子が抜擢、招聘されていました。
  - ・銓子は岡見京子とは旧知の間柄で、週に2回は慈恵医院で京子の助手として診療を手伝いました。
- 
- ・また、慈恵病院の看護婦教育所には看護婦取締として松浦里子が勤務していました。
  - ・銓子は里子をよく助け、同教育所の講義を受け持っていました。これは高木兼寛から受けた恩義に精一杯報いようとしたものでした。
  - ・この頃銓子が記した「看護婦解剖講義録」が現存しています

- ・本多銓子・岡見京子・松浦里子の三人とも敬虔なキリスト教徒であったことから、信仰について語り合うこともあったと思われます。



図1 東京在住医師大日本  
ドクター 岡見京子  
(1859-1941)

- ・明治25年（1892）、静六の帰朝後、銓子は夫に隨い駒場農科大学（東大農学部、現在は教養学部）の官舎に引き移り、やむを得ない依頼の外は診察しませんでした
- ・しかし、医業を捨て去ることはできず、赤坂新坂町に診療所を設け、駒場より人力車で毎日出勤し、治療するようになりました。

- ・このように医業に未練があった銓子でしたが、子供も生まれ、また夫静六を支えるため、診療所を閉じました。
- ・当時の記録には、「妊娠して御殿を下りた後は其の業を廃した」（明治29年4月9日『報知新聞』「女医の現況」）とみえます。



本多家記念写真 明治34年(1901)頃  
(後列左端が銓子、後列右端が静六)

## 診療方針と医者としての心構え

- ・銓子が医師として最も得意とした診療科目は、婦人病（子宮病）と小児科でした。
- ・銓子の診療方針は、境遇のよい人からは普通の治療費を受け、困る人には加減するというものでした。
- ・当時の記録には「婦人と小児に限り一切無料で診察して処方箋を出し、しかも通常の半額すなわち1日分4銭で施薬し、貧困者に限り無料で与えた。」（『女学雑誌』第183号、明治22年）とか
- ・「その薬価は上中下の三等に分け、患者の分限により隨意に納めさせた。往診は遠近に係らず車代を受けず、かつ貧困者には博く施療をした。」（明治25年10月15日『毎日新聞』）とみえます。

- ・銓子は彼女に私淑していた井出（竹内）茂代に「医者はそれに精神を打ち込んで専門にせねば、出来ぬことである。家庭に入りこんでの傍ら仕事では駄目だ。」とか
- ・「医者はどこまでも「対人信用」が大切で、決して立派な家の構えによるものではない。」（『日本女医史』秋山寵三著、昭和37年）と語っています。



竹内茂代（旧姓井出茂代）結婚式の記念写真 大正5年（1916）  
(竹内茂代は銓子の後輩女医で、本多家のかかりつけ医でもあった。  
前列右から2番目が銓子、左から2番目が静六)

- ・銓子は家庭の都合で医業を止めざるを得なかったわけですが、茂代に会うときは、いつも「この状態では、再び医者として立てないかもしないけれど、あなたたけは私の二人分やって欲しい。神様に祈っているから」と口ぐせのように云っていたといいます。
- ・もし医業を続けることが出来れば、きっと立派な医師として多くの人に愛されたことでしょう。

## 夫静六を支え、家庭内を平和に保つ

- ・熱心なキリスト教徒であった銓子は、同情心にあつく、困っている人には着物などを惜しげもなく与えました。本多家に集まる人々は皆、銓子を信頼し、その言葉ならどんなことでも聞く風であったといいます。

- ・銓子は、夫静六に後顧の憂いなく研究活動に専念して欲しいと願い、子育てはもちろんのこと、家庭内的一切の庶事を引き受けました。
  - ・しかも、毎夜子供を寝かしつけた後は、静六の助手として原稿の浄書や講義案の整理をし、さらには英文翻訳や手紙の代筆まで行いました。
- 
- ・また、家庭内を平和に保つため、ジャン憲法を考案しました。これは夫婦間もしくは家族たちのあいだで、何か意見の一致をみないことがあると、お互に2度までは意見を主張し合うが、それでも決まらない場合、3度目はいつもジャンケンで決めるというものです。
  - ・おかげで家庭内はいつも笑顔が絶えなかったといいます。

- ・銓子は静六をよく支え、妻たるものは夫のためにつとめ尽くして倒れるもまた本懐だとの確信をもっていたようです。
  - ・静六が林学博士として大成し、しかも4分の1天引き貯金を実行して財産を築くことが出来たのも、銓子なくしては不可能であったことでしょう。
- 
- ・銓子は不幸にも43才頃から慢性腎臓病を患い全快不能となりましたが、その後14年間は生を全うし、大正10年（1921）12月25日に脳溢血を発して57才で亡くなりました。
  - ・銓子を失った静六の悲しみは深く、彼女の存在なしには、今日の私はありえなかったかも知れないと後に語っています。

- ・銓子の没後、静六は無き妻の遺志に従い東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）へ奨学金として額面千円の帝国公債を寄附しました。そして利子の半額以下を運用して本多銓子奨学金を創設し、後進女医の育成に充てるよう求めていました。
- ・医師としての道は半ばで断念した銓子でしたが、常に後進の育成を気にかけていたことが窺えます。

公許女医第四号 本多銓子講演会 2021.10.25  
久喜市郷土資料館 副館長兼学芸員 栗原史郎先生

関連資料

[https://www.city.kuki.lg.jp/miryoku/rekishi\\_bunkazai/honda\\_00/kinenkankikuten.files/kinenkan27kikakuten.pdf](https://www.city.kuki.lg.jp/miryoku/rekishi_bunkazai/honda_00/kinenkankikuten.files/kinenkan27kikakuten.pdf)

[https://www.city.kuki.lg.jp/miryoku/rekishi\\_bunkazai/honda\\_00/shiryo/honda\\_sassi.files/honda\\_sassi.pdf](https://www.city.kuki.lg.jp/miryoku/rekishi_bunkazai/honda_00/shiryo/honda_sassi.files/honda_sassi.pdf)

<https://blog.goo.ne.jp/tanaka-kenji/e/7623294b99db1f8177d59d252846e58c>